

登米保健所における 発達障害児支援の取組について

東部保健福祉事務所登米地域事務所
(登米保健所)

技師 高橋彩香

報告の概要

- ①登米保健所の発達支援事業の経緯
- ②H25～27年度の事業内容
- ③実施結果
- ④まとめ
- ⑤今後について

登米保健所での発達支援事業の経緯

- 平成23年度まで
児童精神科医による発達相談。医師の確保が困難に。
- 平成24年度
臨床心理士によるアウトリーチ型の発達相談
2回実施し2名の利用

【課題】

- ・ 専門職の不在
- ・ 支援者育成の場の不足
- ・ 親を支援する場の不足

新しい事業

支援者支援

支援者が児の特性をつかみ、対応方法を考えることができる

親支援

支援者が対応方法を家族に伝える
→家族の対応能力の向上を図る



H25年度発達支援事業 発達支援教室

アドバイザー	AASEM(宮城ASD支援者を育成・研修する会) 臨床心理士 猪又 初恵 氏
会場・回数	保健所・年5回

	対象	内容
教室	児3名参加	・ビデオ撮影
検討会	担当保健師 担当保育士	・ビデオ使用 ・特性ひろい, 支援方法の検討

H25年度事業内容①教室

- 受付
- 自由遊び
- お片付け
- 朝の会
- 設定遊び
- おやつ
- 帰りの会
- 面接



H25年度事業内容②検討会

• ビデオを使用し特性をひろう

- コミュニケーションの特徴
- 興味・関心の特徴
- 注意の特徴 など

どう伝えてくる？

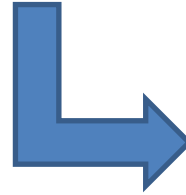
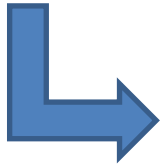
好きなもの
苦手なものは？

集中するものや
集中時間は？

H25年度事業内容③検討会

Aちゃん

行動	原因？	支援内容	結果
待てずに動き回る	刺激が多い？ やることがない？	①しきりを作り刺激を抑えた ②待つ時間に合わせて「ミニ絵本」を持たせた	ミニ絵本を読み椅子に座っていた
注目できない	刺激が多い？ 視界に入らない？	目の前20cmに写真や実物を提示した	注目できて行動に移せた



H25年度事業の結果

参加者	親子3組 支援者実8名
支援者	児の特性と対応を考えられるようになった
親	「どうしてわからないの」から「どうやったら子どもが分かるのか」という考えに変わった
	継続を望む意見があった
課題	参加者数が限られる

H26年度発達支援事業 事例検討会

発達支援教室の
参加希望者が1名...

1事例の支援方法を
細かく検討しよう

アドバイザー	AASEM(宮城ASD支援者を育成・研修する会) 臨床心理士 猪又 初恵 氏
--------	---

会場・回数	保育所・年3回
-------	---------

	対象	内容
観察	児1名	・ビデオ撮影
検討会	保健師・保育士 (担当以外も含む)	・ビデオ使用 ・特性ひろい, 支援方法の検討

H26年度事業内容①検討会

Bちゃん

行動	原因？	支援内容	結果
昼食後に指示されないと行動に移せずウロウロする	時間や先の見通しが持ちづらい？	行動の写真を撮り、カードを作り流れを提示	カードを見ながら行動できた
	注意のばらつき？（周りが気になる）	児の動線を考慮し保育室のレイアウトを変更	変更前よりスムーズに行動に移せた

H26年度事業内容②検討会



絵カード



◇会場が保育所
⇒具体的・応用できる！

H26年度事業の結果

参加者	児1名 支援者実25名
児	行動に変化があった
	保育室のレイアウトを変えたことで他の児にも分かりやすくなった
支援者	児の特性を知り環境設定する大切さが分かった
親	母親が保育所での支援を自宅でもやってみたいと思えた
	継続を望む意見があった
課題	保育所, 事例提供者の負担

H27年度発達支援事業 研修会

事例検討会の対象児
があがらない・・・

ビデオを使って適切
で実用的な支援を
学ぼう

アドバイザー

株式会社アスム療育・研修センター
臨床心理士 猪又 初恵 氏

対象

- ・保健師
- ・保育士
- ・幼稚園教諭
- ・障害児支援事業所職員

内容

- ・ビデオ使用
- ・特性ひろい, 支援方法の検討

研修会

H27年度事業内容

- 課題分析: Bちゃんが着替えを一人で行うには

やるべきこと	実態	評価	支援	評価
袋を取りに行く		○		
自分の場所に戻る	促されて出来る	○		
袋からパジャマを出す		◎		
Tシャツを脱ぐ		◎		
Tシャツを広げる		×		

得意なことは？型紙があれば出来るかな

H27年度事業の結果

参加者	支援者実25名(多職種が参加)
支援者	特性を理解し支援を考えること, チームで考える必要性が分かった
	児を手伝うだけでなく自立できるように支援する大切さが分かった
	継続を望む意見があった
課題	事例があがらない

実施結果① 親の意識変化

実施前

言語能力への期待

対応方法がわからない

皆と同じ行動がとれるよう
になってほしい



実施後

非言語コミュニケーション
の可能性の気づき

特性を見て対応を考え
る必要性の気づき



※アンケートより

実施結果② 支援者の変化

親の支援のためには自分自身が子供の特性・支援方法をよく知らなければいけない

出来ることを増やしてあげるよう支援したい

特性や目標をもっと具体的にスタッフで話し合いたい



実施結果③ 支援者の変化

特性が理解できてきているので
子供にも親にも上手く伝えられることが増えた

学んだ事を現場で実践し
少し変化が見られるようになった



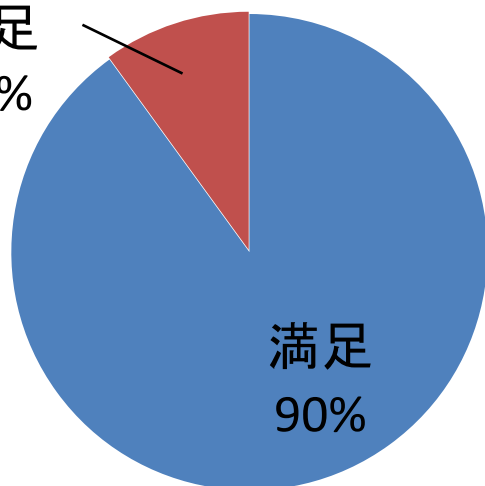
実施結果④ 満足度の高さ

アンケートより〈事由記載〉

- ・事例を通して学べてよかった
- ・実践にすぐ使える内容だった
- ・もっと多くの人に参加してほしい

継続の希望
がある

まあまあ
満足
10%



N=20

H27年度アンケート結果

まとめ

課題

専門職の不在
支援者育成の場と親を支援する場の不足

目標

支援者が児の特性をつかみ対応を考える
家族に伝え家族の対応力の向上を図る
⇒それができる場を作る

実施

発達支援教室・事例検討会・研修会
事例から支援技術を学ぶ

結果

親と支援者の意識変化，支援の変化
満足度が高かった

今後について

- 発達支援事業は、支援者の技術向上の場であり、親へ具体的なアドバイスが出来るようになる効果があった。今後も継続が希望されている。
- 事例があがらないため、実施方法を検討し、親と支援者支援の場を確保する。